

発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

明治の好古家 根岸武香コレクション資料展
—『武蔵国分寺の郡名瓦』—

明治時代初期、熊谷市青山の政治家であり文化財の保存蒐集に先鞭を付けた根岸武香という偉人がいました。根岸は考古資料をはじめ地域史にも関心があり、関係した資料を蒐集し、屋敷地の一角に展示場を設け公開に努めていました。

武蔵国分寺の瓦は、瓦に押された「郡名印」の蒐集を目的とし、武蔵国 21 郡中 18 郡名の陰刻を蒐集していました。ほぼ完成されたコレクションは、武蔵国分寺瓦研究初期の研究論文(沼田頼輔 1901)に使用されています。今回の展示では当時の蒐集品の大半が保存されていたことがわかり、貴重な資料の再発見となりました。今回、根岸家の御厚意により展示を企画しました。5 月末日までの期間にぜひ観覧ください。(新井)



【写真：幡羅郡名の「播」の刻印】

金子兜太氏の名句は永遠に

熊谷市在住で文化功労者の俳人、金子兜太(かねこ・とうた)氏が2月20日、98歳で御逝去されました。戦後の俳壇を先導しながら、生まれ育った秩父地域や熊谷市の風土に根ざした作品を多く残しました。金子氏は1919年に小川町にある母の実家で生まれ、父が医院を開業していた皆野町で幼少期を過ごしました。旧制熊谷中(現・県立熊谷高)、旧制水戸高校、東京帝大(現・東京大学)経済学部から日本銀行に入行。1943年に海軍主計中尉としてトラック島に赴任し、敗戦を迎えました。戦後は日銀に復職し、数多くの俳句を発表しました。1967年、東京都内から故郷に近い熊谷市に転居して以来、ほぼ半世紀にわたって熊谷市で暮らしました。

2015年、金子氏を名誉市民として顕彰していた熊谷市は周辺の町との合併による新しい「熊谷市誕生10周年記念事業」として、熊谷各地域の風景や特色にちなんだ俳句を金子氏に詠んでいただきました。熊谷市中央公園には「利根川と荒川の間(あい)雷(らい)遊ぶ」の句碑が建立されています。その他、根岸家長屋門(青山)、荻野吟子記念館(俵瀬)、文殊寺(野原)にも建立され、隣接して設置された解説文は江南文化財センターが担当しました。これらの句碑をはじめ、金子氏が詠んだ多くの俳句には熊谷の自然と歴史を再認識できる文言が含まれています。このような名作を熊谷の歴史を語り継ぐ遺産として啓発を進めることができたらと考えています。(山下)



【写真は熊谷市野原にある文殊寺に建立された句碑と金子氏 2016年4月】

熊谷市誕生10周年記念事業「熊谷の俳句」(設置場所)

利根川と 荒川の間 雷遊ぶ(熊谷市中央公園) 草莽の臣 友山に 春筑波嶺(根岸家長屋門)
荻野吟子の 生命とありぬ 冬の利根(荻野吟子記念館) 行雲流水 蛭訪なう 文殊の地(文殊寺)

市内遺跡発掘情報

平成 29 年度上之土地区画整理地内遺跡の発掘調査について(後編)

市内上之では土地区画整理事業を進めるにあたり、事前に発掘調査を行っています。今回は、平成 29 年 7 月から 11 月まで実施した前中西遺跡の調査についてご紹介いたします。

今回の調査箇所は、遺跡範囲内南東部に位置し、主に弥生時代後期(約 1,900 年前)と古墳時代後期～平安時代(約 1,400～1,000 年前)の遺構・遺物が見つかりました。弥生時代は方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)、古墳時代後期～平安時代は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが見つかったことから、前者は墓域、後者は居住域として土地利用がなされていたことが判明しました。(松田)



古墳時代後期竪穴住居跡発掘作業風景

諏訪木遺跡発掘調査事業

平成 28 年度から始まった市道 137 号線新設道路建設予定地となる諏訪木遺跡の発掘調査は、今年の 3 月をもって終了を予定し、多数の遺構、遺物が確認されています。

調査箇所は、一乗院の門前付近であり、関連すると見られる江戸時代の土師質土器皿を大量に廃棄した井戸跡や寺院の区画堀、当時の建物跡の柱穴跡などが確認されています。

また、BUNKAZAI 情報第 20 号でも紹介した弥生時代中期の方形周溝墓が今回の調査では 3 基確認されています。周溝の両端には弥生土器(1～2 個体)が意図的に配置されているため、祭祀的な意味をもっているものと考えられます。

この周辺には、底部に穿孔のある弥生土器が出土した同時代後期のピットが 2 基確認されています。これは、土器棺墓としての性格も考えられますが、土器の底部が穿孔されているため、別の用途で埋められたものとする方が有力と推定されます。(腰塚)



堀跡から検出されたかわらけ(17～18 世紀)



弥生時代後期の弥生土器壺(底部に穿孔)

連載 くまがやの古墳群

⑩ 飯塚古墳群 —工業団地造成をきっかけに発見された古墳群—

飯塚古墳群は、妻沼地域飯塚・永井太田地区の利根川右岸、妻沼低地の自然堤防上に所在する主として古墳時代後期に造られた古墳群です。

妻沼西部工業団地造成及び県道拡幅工事に伴う発掘調査により、21 基の古墳の存在が確認されて



います。墳形としては、円墳と方墳の 2 種類があり、不明の 1 基を除いて円墳が 17 基、方墳が 3 基という構成です。円墳の規模は径 6 m～20 m と多様です。一方、方墳は一辺 7 m 前後と 25 m 前後のものです。

古墳には、埴輪を樹立したのから埴輪の樹立をやめた時期のものまであり、およそ 5 世紀末～6 世紀初頭から始まり 7 世紀初頭までと約 100 年の長期にわたって形成された古墳群です。主体部(遺体を安置した埋葬施設)が確認された古墳はわずかに 4 基で、いずれも 5 世紀末～6 世紀初頭に爆発し噴出した榛名山二ツ岳の角閃石安山岩を用いた石室であることから、噴火後近くの利根川を流れ転石となった石材を採取して造られたと考えられます。(吉野)

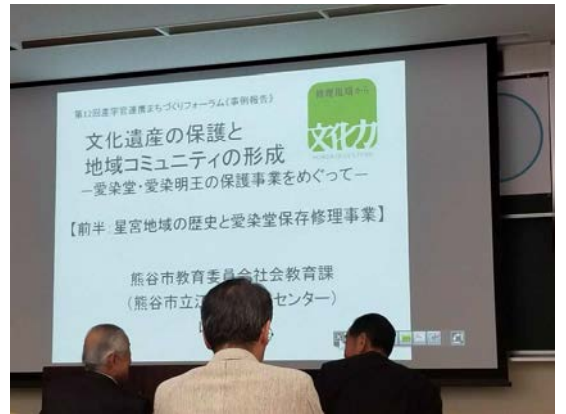
【写真：飯塚古墳群第 1～9 号墳(右は備前堀) 写真提供：公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団】

◇熊谷市産学官連携まちづくりフォーラム

—事例報告「愛染堂保存修理事業」—

熊谷市と立正大学、熊谷商工会議所、くまがや市商工会は、産学官連携に関する基本協定を締結し、協働によるまちづくりを推進しています。この協定に基づく連携事業の中の1つである「熊谷市産学官連携まちづくりフォーラム」は、立正大学の先生方を中心に、産業・教育・環境等の各分野における産学官連携について、講演や事例報告を行っています。

平成30年2月17日、立正大学熊谷キャンパス・ゲートプラザで開催された第12回熊谷市産学官連携まちづくりフォーラムでは、立正大学仏教学部教授である秋田 貴廣氏とともに、平成28年度に完工した協働事業「愛染堂保存修理事業」について事例報告しました。「文化遺産の保存と地域コミュニティの形成—愛染堂・愛染明王の保護事業をめぐって—」というテーマで、愛染堂の所在する星宮地区の歴史や文化財の解説、愛染堂保存修理プロジェクトの経緯、そして仏像の保存を通じた地域コミュニティの在り方や課題、今後に向けた提案について発表しました。なお、その報告の様子は熊谷市立江南文化財センターYouTubeにアップロードしました。どうぞご参照ください。(山下)



◇熊谷うちわ祭講座 in 熊谷市立大幡小学校

2月27日、熊谷市立大幡小学校にて第3学年の児童を対象に熊谷うちわ祭講座を開催しました。



前半はパネルなどを利用して熊谷うちわ祭の歴史について、江戸時代の神輿祭りや山車・屋台巡行の祭礼の概要を含めながら、3年生向けとして分かりやすさに心がけて解説しました。後半は熊谷うちわ祭についての児童それぞれの質問を一問一答形式でインタビューし解説者が答えるという質疑の時間を設け、多くの情報共有ができました。なぜ、うちわ祭と呼ばれるようになったのか、山車・屋台がどのくらいあるのか、どこの職人さんが作ったのか、うちわ祭はどのような思いで受け継がれているのか、祭を始めた人はどなたかなど、多様な質問が出され、うちわ祭への関心の高さを知ることができました。(山下)

◇熊谷市文化財保護審議会の開催

3月22日、平成29年度第2回熊谷市文化財保護審議会を江南文化財センターにおいて開催しました。本市文化財保護審議会は10名の委員兼専門調査委員によって構成され、熊谷市の文化財保護行政に関わる協議事項や、指定文化財の答申などを審議しました。また、幡羅官衙遺跡群の国史跡指定や歓喜院聖天堂の美装化事業の進捗などについて報告したほか、予定されている文化財保護法の改正による今後の展望などについて情報共有しました。(山下)



【文化財探訪 埋蔵文化財の届出事務・工事立会】

市内での開発行為等において、その土地が埋蔵文化財包蔵地(遺跡)内または隣接している場合、発掘届・照会文書の提出が必要となります。届出提出後に該当地において、近接地等の調査データを確認し、基礎の工法等により埋蔵文化財に影響を与える工事かどうかを判断します。その結果に応じて試掘調査、工事立会、慎重工事等の指示を届出者に対し連絡します。なお工事立会は、掘削範囲が狭い浄化槽の埋設や、盛土等により保護層が設けられるような基礎の工法の場合に職員が現場に立会い、計画どおり工事が施工されているか確認するものです。

近年、個人住宅に係る届出が増加傾向にあり、住宅の補助金、減税、金利優遇制度もその一因となっているのではないのでしょうか。(小島)



工事立会での測量(熊谷市上之地内)

文化財コラム 空から見た遺跡

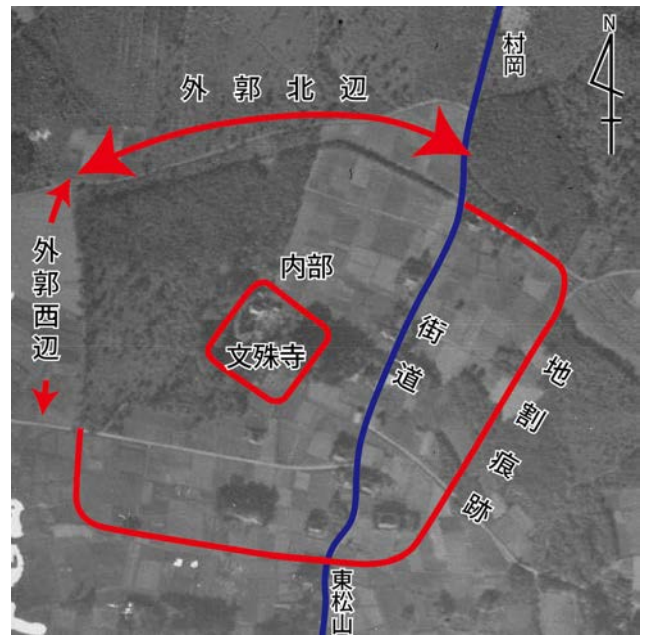
関東大乱の遺跡か増田館跡に見る「陣所」とは

知恵の文殊様として知られる野原の文殊寺には、境内林の一角に中世の土塁と空堀の跡が巡っています。西側と隣り合う立正大学との敷地の間に西辺 230m、北辺 320m程の区画となっており、旧地割から推定される本来の規模は約 400×300mの略方形に堀と土塁の巡る城塞の「外郭」をなしていました。また、本堂・庫裏を取り囲むように一辺約 110m方形の堀が「内郭」を区画しています。「内郭」と「外郭」の走行・規模は異なり同時期かは疑問で、外郭は境内地外を大きく含むことから文殊寺創建以前に造られた可能性が高いと思われます。「内郭」は文殊寺の本堂—参道—山門と軸線が一致しており伽藍を巡る寺域溝であると推測されます。

昭和 35 年(1960)撮影の航空写真には境内を囲む外郭線に沿った立木のラインがはっきりと確認され、盾状の屈折ラインは北面に向けた陣形(魚鱗又は鋒矢の陣形)を示しています。北側には古代以来交通の要

衝で戦略上の拠点でもある荒川渡河点に成立した「村岡宿」が位置し、康暦 2 年(1380)小山義政の乱の後、永享 12 年(1440)の結城合戦まで、何度も「村岡御陣」が設営されました。足利公方をはじめ数千の軍勢が滞留した陣所の位置は不詳ですが、増田館跡は、臨時的・一時的な拠点又は防御施設であった「陣所」のあった可能性が高いと考えられます。

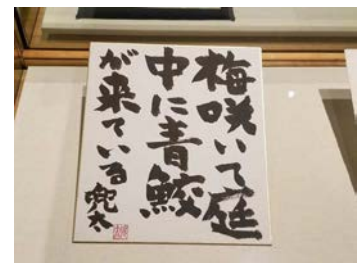
享徳 5 年(1458)から勃発する享徳の乱から山内・扇谷両上杉氏の抗争(長享の乱 1488~1505)以降は、五十子陣(本庄市)を前線に繰り広げられたことから村岡陣の役目は遠ざかったと云え、文明 15 年(1483)に文殊寺が創建されています。なお、陣所と推定される大規模な外郭線を残す遺跡は応安 3 年(1370)に足利氏満が滞陣した本田館跡(深谷市)があります。(新井)



編集後記

「梅咲いて庭中に青鯨が来ている」。この句は俳人の金子兜太氏が詠み、多くの人々の記憶に残る名句としても知られています。金子氏の没後、埼玉県立さいたま文学館での追悼展ブースにおいてこの直筆の俳句が展示されています(写真)。金子氏が昭和 42 年に熊谷市上之に転居し、平野の中にある熊谷の地を思いながら、庭に咲いた梅の花を見ると、庭全体が海の中のように感じ、梅の木が海の中にある藻のように想像が及んだ。そこを青鯨が泳ぎ回る様子を想像したと金子氏はこの句について記しています。そこには戦時中に見た太平洋の海との関連が見出せるなど、句の中にも複眼的な特色が含まれています。梅の咲く季節を過ぎ、百花繚乱の春へと進み行く日々の中で、熊谷にも青鯨が泳いでいるのではないかと、そんな感覚を懐いています。

日本を代表する俳人である金子氏は亡くなられましたが、熊谷などについて詠まれたこれらの句は地域の一つの遺産として今後も地域の歴史や文化に光を当て続けていくと考えています。金子氏が伝え続けた俳句や郷土の歴史に対する想いを、文化財保護の領域においても引き継いでいくことができるように研鑽を続けたいと考えています。(山下)



発行：平成 30 年 3 月 30 日 (2018/03/30)

熊谷市立江南文化財センター (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代 3 2 9 番地

電話：048-536-5062 FAX：048-536-4575 メール：c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記」、熊谷市観光文化財ナビゲーション・アプリ「くまここ」更新中